

One purpose

FOR BETTER COMMUNICATION



同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY

169

2011
December



特集

想いは東へ、
震災の「体験」と「記憶」から

●同志社人訪問

株式会社高島屋執行役員

宇都宮 優子さんに聞く

『ONE PURPOSE』は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションをはかることを目的として発行しています。ささいなことでも結構ですので、どしどし広報課までご意見・情報をお寄せください。



特集

想いは東へ、 震災の「体験」と「記憶」から ----- 2

ゼミ探訪 学びの時間 ----- 9

スポーツ健康科学部 石倉 忠夫 ゼミ

同志社の研究は今 ----- 11

炎症・再生医療研究センター 小泉 範子 生命医科学部教授

来年度就職を目指す皆さんへ ----- 13

CAMPUS NEWS ----- 15

同志社キャラクター「八重さん」誕生！／NHK2013年大河ドラマ『八重の桜』制作班来学／同志社大学×京阪電車連携イベント「駅コンサート&マジックショー IN 三条ステーション！」開催／脳科学研究科設置記念講演会開催／アーチェリー部 全日本学生選手権大会優勝！／スポーツ健康科学部・石井研究室に京都市長から「未来の京都まちづくり推進表彰状」贈呈／理工学部・盛満教授がレアメタル・ベースメタルの革新的製造方法を事業化／関西4大学学長フォーラム開催／同志社大学震災救援義援金のご報告／第40回 Neesima Room企画展／今年度の新司法試験結果について／本学教員執筆図書紹介／他

留学生紹介 ----- 19

劉 幸さん(文化情報学部)

INTERVIEW ～同志社人訪問～ ----- 20

株式会社高島屋執行役員 宇都宮 優子さんに聞く

MY JOB, MY LIFE ～シリーズ 私と「仕事」～ ----- 23

・伊藤 雄太さん(2001年 文学部英文学科卒業)

・柳沢 洋子さん(1996年 商学部卒業)

ANNOUNCEMENT ----- 25

Special Interview ----- 27

前田 信弘さん(1996年 経済学部卒業)

表紙の情景 [大原農家キャンパス「農縁館」]



総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーション研究コースの社会実験施設。左京区大原の三千院近くに建つ築240年を超える木造平屋建、茅葺の農家住宅で、かつて大原茶屋として親しまれた建物。国指定の登録有形文化財(建造物)でもある。西側には平安時代から続く「つくだの棚田」が日本の農村の原風景を楽しませてくれる。この農縁館や農地で、現代有機農業論や自立自給型生活論などの実習型講義のほか、綿を栽培し糸を紡いで織った生地を染める“スロークローズ”、同志社小学校の児童・保護者を対象にした「食育ファームin大原」などの大学院生の社会実験が行われている。

このたびの東日本大震災の被害にあわれた皆さまに、心からお見舞い申し上げます。

特集

想いは東へ、 震災の「体験」と「記憶」から

家族、友人、恋人、家、街、自然、思い出、平穏な日々の暮らし…

大切なものを根こそぎ奪い去っていった地震と津波。

濃淡はあるにせよ、その喪失感は日本人のすべてを

覆い尽くした。

深い悲しみの淵にいる人びとには、多くの想いが向けられている。

あの日から半年を超える時間が過ぎた今、

私たちは震災とどう向き合い、どんな想いを抱き、

それぞれの体験や記憶からどんなことを自身の糧にすべきなのか。

この特集を、1人ひとりが震災について考える縁^{よすが}としたい。

それぞれの「3・11」を語る

東日本大震災は、規模や被害の甚大さだけでなく、私たちの生活や価値観にまで大きく影響を与えた。震災が私たちに何をもたらしたのか、ボランティアとして被災地に赴いた人、別の形で関わりを持つ人…それぞれの立場から震災を語ってもらった。



関谷 直人
【神学部教授】



真銅 正宏
【学生支援センター所長】

真銅 ● 本日は、東日本大震災について、お集

まりいただいた皆さんからそれぞれの体験を踏まえてお話しいただき、被災地から遠く離れた同志社大学の学生の皆さんが、この未曾有の災害をどのように感じ受け止め、どう向き合っていけばよいのかということを中心に考えていきたいと思っています。最初に、神学部の学生がかなり早い時期に現地入りしていたと聞いていますので、その状況について関谷先生からお話しいただけますか。

関谷 ● 阪神・淡路大震災を契機に設立された日本基督教団の「被災者生活支援・長田センター」が、震災発生から3日後には東北教区で震災支援センターの立ち上げに協力しており、その関連で神学部の学生が石巻栄光教会をベースにボランティア活動を行いました。私は1ヶ月後の4月11日に問按に行ったのですが、町はほとんど被災したままの状態でした。当時、学生たちは教会付属の幼稚園の2階に雑魚寝をして、全国から集まったスタッフたちと自炊をしながら、被災家屋の泥かきや、汚れた家具を家の外へ運び出すといった作業をしていました。教

1人ひとりがそれぞれでいい。

会に寄せられた要請を受けて、誰がどこに行くかの作業の振り分けもやっていました。

真銅 ● 大西さんは5、6月の2回ボランティアに行ったということですが、そのきっかけと向こうでの活動、感じたことなどを聞かせてください。

大西 ● 僕がいる陸上競技部の部員のお父さんが、「チームレスキュー」という学生を中心とするボラン

ティア団体を立ち上げて宮城県の七ヶ浜町に行くということで、誘われたのがきっかけです。部から交替で毎月参加しています。海沿いの町で津波被害が大きく、現地ではがれき撤去、民家のヘドロのかき出し、屋内の拭き掃除などのほか、山道から浜までジャングルのようなところを切り拓いて道を

造るということもしました。また、陸上競技部として、ソフトボールを投げたり、100メートル走のタイムを計って賞状をあげるというような陸上教室を開いて、地元の子どもたちと一緒に遊んだりもしました。避難所では十分に体を動かさないので、久しぶりに力いっぱい走れたことを喜んでくれま





小寺 由純 さん
【政策学部 4年次生】



平子 咲 さん
【文学部英文学科
4年次生】



川 恵実 さん
【社会学部社会学科
4年次生】



大西 雄一郎 さん
【商学部 4年次生】

大事なものは、知り、伝えること。

した。それから、七ヶ浜へはバスで行ったのですが、高速道路を走っていると被災地が広く見渡せるのです。そこで見たのは、あるところまでは町が残っている、そこから先は津波でさらわれて更地になっている。わずかなメートルで、まるで命の境界線とでもいうようなものができている情景でした。

真銅●まさに現地を見た人ならではの言葉ですね。川さんはドキュメンタリー映像を撮る目的で行かれたのですね。

川●就職活動をしていたので、最初に行ったのは6月です。宮城県気仙沼市の大島で活動する「つなプロ」というボランティア団体に参加しました。人々が希望を持って自らの足で立ち上がっていくための第1ステップとして、安心安全な暮らしを営む基盤づくりをするために、大島全土の家庭や避難所、仮設住宅を1軒ずつ訪問す

る活動をしていました。1週間滞在して、関西にも「つなプロ」の活動を中心に現地の実情を伝えようと、7月に撮影のために行きました。

真銅●撮影でこんなことが印象的でしたか。

川●被災地では皆さんが被災者なのです。被災者であることが当たり前、しかも皆さん

んすぐ頑張っていて、頑張っていることも当たり前になっていくから「私は頑張っています」と口に出せない状況なのです。そういう頑張っている人たちがこんなにたくさんいると伝えることが、被災された方にとっても力になるんだと言っていました。

真銅●現地に行くのではなく、京都で支援活動をしている方もいます。学生支援センターの障がい学生支援室で行っている、聴覚に障がいのある学生へのパソコン通訳を、被災地で情報保障体制を整えるのが困難な大学に対して実施しようということで、この活動に加わっているのが平子さんです。活動のことやその時の状況を教えてください。

平子●私も実際に被災地へ行ってボランティアをすることも考えたのですが、3月はニューヨークに滞在していましたので、な

かなか情報が入ってこない中でむやみに行くのもどうかと感じていましたし、京都にいても自分にできることがあるのだと分かって参加しました。今回の遠隔情報保障支援は、パソコン通訳をする学生が被災して、聴覚障がい学生への授業保障ができなくなつた大学に対して、別の地域の大学が支援する活動です。具体的には東北地区の大学で講義する先生の音声を、私たちが携帯電話で聞いてパソコンに打ち込み、インターネット上に配信します。そのサイトを現地の聴覚障がい学生がiPhoneで見えることでリアルタイムに受講できるというものです。春学期は、全国13大学が東北地区の4大学を支援していて、その中で同志社は約8割の授業を担当していました。支援を希望される大学は大変な状況なわけですから、皆さん

ん気落ちされているのではないかと思っていたのですが、電話から聞こえてくる声はすごく元気で明るくて驚きました。ただ、そんな中でも何度か授業中に余震がありました。緊迫感が一瞬にして高まり聞いているだけでこちらまで緊張するほどでした。

真銅●小寺さんは今年から在学生が開催に関わることになったホームカミングデーの実行委員として、被災学生への義援金を募るなどの活動に関わられたそうですね。被災地へ



行っていないという意味では、多くの本学学生と同じ立場だと思います。その点から、震災についての想いを聞かせてください。

小寺●僕が震災のことを知ったのは、テレビの報道やツイッターを通じてなのですが、兵庫県出身で幼い頃に阪神・淡路大震災を経験していることもあって、被災地の状況をテレビ越しに見ても涙が出てくるほどでした。就職活動もあって被災地には行っていませんが、自分にも何かできないかという思いはありましたので、ホームカミングデーの実行委員をしていたことから、被災学生への義援金を募る活動や、被災地で活動した学生によるボランティア報告をプログラムに組み入れることを企画したのです。僕たち学生に比べて、年配の方や社会人の方は被災地にはなかなか行けな

いので、そんな方たちにも被災地の現状を知ってもらうことで、支援の幅が広がるのではないかと考えたのです。

真銅●現地に行つて初めて分かることもあれば、離れているからこそ見えてくることもあるはずです。皆さん震災への関わり方は異なりますが、私は、個々の受け止め方があっていいと思っています。それぞれの立場でできることについて、感じることを、考えることなどはあります。

大西●僕は体育会系なので体を動かして支援をしたいという想いからボランティアに参加したのですが、慣れてくるとだんだん大きな案件を任せられるようになってきて、その達成感が大きく、自分の力が役に立つならまた行きたいという気持ちになります。

川●交通手段も食事何かもも自前で行くのが前提だった震災直後と今とではボランティアにできることが変わってきていると思うのですが、大島で民宿を経営されている方の「ボランティアは被災地の営業マンになってほしい」という言葉が、とても印象に残っています。その方は「一緒に」というフレーズを何度も使って、一緒にがれきを撤去したい、一緒にご飯を作って食べたい、一緒に後片付けをしたいとおっしゃっていました。一緒に何かを共有することで生まれた絆を関西に持って帰って、被災地での体験を伝えてほしい。だからこそ自分たちが完結したボランティアでは困ると。それが、これからのボランティアのひとつの形な

いのちの境界線が見えた。

のではないかと思います。

関谷●確かに必要とされることは変わってきています。泥かきなどの当初のような仕事は業者が本格的に請け負うようになり、なくなっているところもあります。これからは仮設住宅入居者のお話を傾聴するなど、メンタル面のケアもより重要になるでしょうね。

川●メンタル面というと、同じく大島の方が「ボランティアに来てくれた人だけでなく、関西からも応援してくれている人がいるのを知ることがすごく力になる」とおっしゃっていました。募金ひとつにしても、お金を届けるだけでなく、募金した人の裏にある気持ちや募金に込められた想いを、被災者に知ってもらうことが力になるんだと知りました。

平子●私は、離れていても自分のスキルを活かしたサポートができるように、遠くからでも想いをつなげることはできるのだなと感じています。

関谷●神学部のように小規模の学部では、ボランティアに行った学生の割合が比較的大きいので、行っていない学生が負い目を感じる場面があります。かたや行った学生の中にはノルマを果たしたような雰囲気



これが正解という答えはない。



漠然とあるのですが、もちろん行くことは大事ですが、単に行けばいいわけではありません。挨拶にも疲れたので、問答だけなら来ないでくださいと率直に言われたこともありました。

小寺●僕はNPO関連のセミに所属しているので、神学部と似た状況があつて、行った人の話を聞くたびに申し訳なく思います。だからこそ、こちらでも何かやらなければという思いになります。

関谷●その点では、関西に避難されている方への福祉関係のボランティアなどは人手が必要になっていて、こちらにいてもできることがありますよ。

真銅●地域や時間によって被災や復興の程度、必要とされることが違うわけですが、私たちは震災を一括りにして二面的な見方をしてしまいがちです。だからこそ皆さん

無理せずにできることがある。



にお話ししていただいたような様々な声を聞く必要があると思っています。これを読んでいる方々も、それぞれに今回の震災に対する考えをお持ちだと思つのですが、皆さんから伝えたいことは何でしょう。

大西 ● 自分にできることは、現地でボランティア活動か、募金くらいしかないと思つていたのですが、ほかにもできることがあるとわかつたので、同じようにできることは限られていると思つている人も調べれば何らかの形で関われると思います。

川 ● 同志社の学生としては、聖書の「隣人をあなた自身を愛するのと同じように愛さない」という意味の言葉にある「隣人」の意味を考えてみてほしいです。遠く離れた被災地にいるまったく知らない人たちの隣人になるとういうことが。そのために

は、まず実情を知る、知つた上で想う、その

想いを何らかの形で伝える。それが、私たちにもできることなのではないでしょうか。また映像を撮る側としては風化させないように情報を伝え続ける責任もあると思うのですが、情報を受け取る側も、忘れず記憶にとどめておくことが必要だと思つています。

平子 ● 私も中学、高校とカトリックの学校に通つていたので、隣人を自分のように愛するとういうことを考えるのですが、誰にもきつと無理せずにできることがあると思つてですね。どこにいてもできることは必ずあると思つので、自分が被災した立場だったらどうしてほしいかを考えて、冷静に情報を集めながら探してほしいです。

小寺 ● 僕は、被災地に行く行かないのは是非は問えるものではなくて、重要なのは何のために行くかだと思つています。何もしないまままで過ごしてはいけないと思いますが、就職活動に有利になるのではないかと、みんなが行つていからとりあえず自分も行つてみようとういうのは問題です。行

想いと行動は、常に車の両輪。

くなら目的意識を持つて行くべきだし、想いと行動は常に両輪でなければ、本当に被災地のためにはならないと思つのです。

関谷 ● 教員の立場としては、長期間ボランティアに行つたきりというのも、履修の面で心配になる部分もあります。ボランティア活動に単位を付与するとういう意見もあるようですが、本人たちは献身して行つていくわけですから、単位にするのは彼らの想いを無にすることになります。だから私は行くも行かないもそれぞれの責任と判断でいいと思つのです。ただ、今回の震災でいろんなことを学んだとか、ライフスタイルを根本的に考えさせられる機会になつたとか、自分の人生観が変わつたとう話を被災地に行つた人から聞くと、気になることがあります。被災された方々は、何も他人の人生観を変えたいわけでも、新しい日本の礎になりたいわけでもない。あの日までと同じような生活がしたいと思つているわけです。ボランティアをすることが自分たちの生き方に影響を与えるのは事実ですが、なぜ行くかと言つと、純粹に被災地の人たちのために行くわけでは自分のために行くわけではないのです。それを前



提に、自分が置かれた状況の中でどう関わるかを、それぞれが受け止めて考えることが重要で、これが正解という答えはありません。復興には10年、20年と長いスパンで向き合っていかなければならないでしょうから、これからどういふことができるかを胸に留めて、自分だったら何ができるかを考えてもらえればと思います。

真銅 ● 関谷先生がおっしゃるように、それぞれの立場で想い、考えることが大切で、そこから始まります。その際、隣人のことを考えるのも、何が正しいかというのを超えて自分なりに模索するのも想像力が重要です。学生の皆さんには、想像力をしっかりと持ち、自分なりの向き合い方を考えてもらえますことを願つて、今回の座談会を終わります。皆さんありがとうございました。

亡くした、大切ないのちに向き合って

震災の被災者の喪失感、悲嘆の大きさは計り知れない。大切な人、大切なものを理不尽に奪われた人びとの「グリーンフケア」に立ち上がったのが、自身の体験を原点到、大学に通いつつ大切な人を亡くした人たちのサポート活動を行う尾角光美さん（文学部社会学科新聞学専攻4年次生）。「泣いてもいい、頑張れない時があってもいいんです」と言っつまなざしは、とてもあたたかい。

被災地に赴いた最初は無力感しかありませんでした。そこで何ができるかなんて、とても考えられない。祈るしかないんです。ただ、被災された方が穏やかな気持ちでいられる時間が少しでもありますようにと願うしかない。ケアや支援は必要なのですが「心のケアをしに来ました」なんてそんな傲慢なこと、とても言える状況ではありませんでした。何かをしようというのではなく、誰かに出会えたらお話を聞こう、出会えなくてもとにかくその時の風景をできる限り目に焼き付けておこう、そんな気持ちでした。

盛岡に入り、釜石、陸前高田、大槌、石巻、そして福島へ。尾角さんが震災の現場に立ったのは、4月6日。偶然にも震災の前日は仙台、当日は福島にいた。仙台で「今後は東北に足繁く通うことになるそうですね」という話をしていたら、翌日に地震。いったん帰京したものの、「早く東北へ」の思いは募っていた。

その時、津波で奥さんを亡くされたおじいさんからお話を聞くことができました。おじいさんは「私が殺したようなものだ」

と。もしあの時、自分が仕事に行かなかったら、側にいて救えたかもしれない、そう思っておられて、それはまさにグリーンフケアの象徴的なことなのです。そんな強い自責の念を持たれている人に「あなたは悪くない」と言っても意味がないんですね。自分を責める気持ちをなくすことではなく、「亡くなった方がそれだけ自分にとって大事な存在だったんだ」と感じられるようにしていくのがグリーンフケアなのです。亡くなった方々の葬儀すらできない状況で生き残った自分は何もできていないと、自身を責める気持ちをどこへ持っていけばいいのかそんな現実とどう向き合っていけばいいのか、少しでもその助けになるようなものを届けることができれば。

そんな思いから作ったのが、「大切な人をなくしたあなたへ」と題した冊子。詩のような短い言葉とシンボリックな絵、専門家によるグリーンフー死別や喪失体験によって感情・行動・思考が閉じ込められている状態——との向き合い方の解説などで構成されている。ご遺族に祈る時間を持っていたいただければと「一番



「一会」と名づけたお香との組み合わせで7,000セットを作製し、震災後百か日に合わせて現地で配布。今も主に地域の寺院や遺族の会の集まりで配っている。

阪神・淡路大震災で神戸の人たちの支援に対する反応

「は、ありがとう」
だったのですが、東北では「ごめんなさい」なのです。東北の人たちは自分たちでは自分たちが何とかしたい迷惑をかけたくないという気持ちがとても強いんですね。もともと自殺率が高い地域なのですが、それは外に助けを求めるということをあまりしないからではないでしょうか。それでもどうか届くようにと、冊子の中にも「大切なひとをなくした人のための権利条約」という項目を入れました。

第1条 悲しんでもいい落ち込んでもいい
第2条 自分を許してもいい
第3条 考えない、思い出さないときもいい

第4条 自分を大切に

第5条 助けを求めよう

第6条 みんなが、それぞれにいい

第7条 自分の人生を歩んでいい

我慢しなくては、頑張らなくてはと思う人たちが多いので、大切な人を亡くしたことを素直に悲しむ時間を持つていい、自分を責めずに許してあげていい、自分にOKを出せるような気持ちになしてほしい。東北の人たちは自分よりもまず周りを、と思うんですね。岩手に行けば宮城の被害の方が大きいとおっしゃるし、宮城では福島は原発事故で大変だとおっしゃる。ある小学校の校長先生はこう話されました。「日本はまだましです。難民キャンプに行けばもっとひどい。私たちはご飯を食べられていますから」。

尾角さんのグリーンフケアへの取り組みの原点は、2003年3月18日、大学入学直前の母の自殺。進学を迷ったが、とにかく歩を進めようと大学生生活をスタートさせた後も、心身ともに不安定な状態が続き、休学を繰り返す。

母を亡くしてから4、5年は、ちよつとしたことで死にたくなるくらい辛い気持ちでした。そんな中で新聞学専攻の友人たちや先生の存在はとても大きかった。体をこわして授業に出られない時は、友人たちがレポートやノートを持ってきてくれました。たし、先生は母の自殺のことを話しても特別な目で見ることなく、私には父もいませんでしたから、まるで本当の父親のように温かく見守ってくださいました。休学が続いて単位が取れていなかったことに加え、奨学金だけでは学費を払い続けるのも難しく、何度も退学を考えました。友人とその家族と一緒に話し合い、あらゆる方向から検討して最終的に卒業しようと思ったのは2009年1月です。この時にやっと「学生になれるんだ」と思ふことができました。卒業するのは就職するためでも、世間体をつくるためでもなく、自分の中では応援してもらった人への恩返しなのです。私にとって9年という数字は、それだけしんどいことがあったという証でもあるので、「何かあったら言つてね」と気遣ってくれた同級生たちにも「卒業できたよ」と報告したいし、今までの人生を支えてくれた人たちに、卒業することによって「ありがとう」を伝えたい。同志社大学に入って、最初は辛かったけれど、同級生、先生、たくさんのお会いに恵まれましたからすごく幸せです。

母の日は、母を亡くしたアメリカの少女が追悼の会を開いたのが始まりで、2008

年がその100周年と知り、自分と同じように母を亡くした人たちの「母への手紙」を本にまとめる『母の日プロジェクト』をスタート。その活動を継続していくために2009年、『Live on』を立ち上げた。2010年には、大切な人を亡くした人たちを寺や葬儀社と協力して支える『グリーンフサポート』で、社会起業家向けビジネスプランコンペedgeの優秀賞を受賞した。

グリーンフサポートを行う上で、一番困っているご遺族からお金をいただくわけにはいきません。ですからお寺や葬儀社がサポートやサービスを提供できる仕組みをつくって、私たちが橋渡しをするような形を考えました。ビジネスという言葉は適当で

はないかもしれませんが、ボランティアでは限界があるので、継続可能な形にしたいと考えたのです。今、社会起業家に興味を持っている学生がたくさんいます。自分が人生で実現したい何かがあって、そのための手段として企業に入って何かを身につけるか、最初から起業するか、その1つのモデルになればとも思っています。

私の一番の役割は、希望があるという旗を掲げることだと思っています。震災で悲しいことは変わらなければ、それがあつたからこそつくられていく新しい社会があります。喪失から生み出していく、紡いでいくものが必ずあるということを、忘れてはいけません。それは震災が起きてからずっと思っていることです。

尾角光美さん

「文学部社会科学新聞学専攻4年次生」

スポーツ健康科学部 石倉忠夫ゼミ

1期生の学生と初担当の先生が 手探りでつくりあげてきたゼミ

2008年4月、社会的関心が高まる健康とスポーツをテーマにした学部として誕生したスポーツ健康科学部。多角的かつ科学的な視点からスポーツと健康を学び、健康の維持・増進とスポーツの社会的発展に寄与・貢献できる多様な人材を育成することが、その目的だ。

学びの領域は大きく「健康科学」「トレーニング科学」「スポーツ・マネジメント」の3つに分かれるが、それぞれのフィールドに縛りはない。特徴の1つが、教員1名に学生約8名という徹底した少人数教育。特にゼミには力を入れており、1年次の春学期と3・4年次に配置したゼミは必修になっている。

今回訪れた石倉忠夫教授の専門分野は、トレーニング科学の領域に属するスポーツ心理学。

「スポーツ心理学の範囲は幅広く、日本では主に次の4分野がスポーツ心理学としてカテゴライズされています。まず1つが運動の学習と制御、2つ目が応用スポーツ心理学。いわゆるアスリートのメンタルトレーニング、ストレスマネジメントの研

究や実際のサポー

トを行う分野で

す。3つ目が健康

スポーツ心理学。

健康の維持増進の

ために、どのよう

にスポーツに取り

組めばいいかにっ

いて、心理面から

アプローチする分

野です。残りの1つが臨床スポーツ心理学

ですが、スポーツ選手に対する精神的なカ

ウンセリングにまで踏み込むため、これに

は臨床心理士などのライセンスが必要に

なります。私自身はそのライセンスを持っ

ていませんので、私のゼミの学生は、3つ

目までの分野のどれかを選ぶことになり

ます」。

3年次のゼミは、2年次の10月に、各自

が第1希望から第3希望まで希望する

ゼミを申告、希望者が最大10名の定員を

オーバーしたところは抽選になるが、年内

には所属が決まる。

石倉ゼミでは、春学期は、まずゼミ生そ

石倉忠夫

【スポーツ健康科学部教授】



れぞれが関心のある研究論文や本を選んでプレゼンテーションをする。知識が机上の空論で終わらないよう、今年は親睦を兼ねてゴルフ練習場へ出かけて簡単な実験を行った。スイングをビデオで撮影し、プレーヤーにどうフィードバックすればよいかや、プレッシャーのかかった状態で打つとどうなるかといったことを体験的に検証したという。「ハイレベルな競技になるほど心理面の比重が大きくなります。ゴルフはとくにメンタルのスポーツと言われていますから」と石倉教授。



秋学期に入ると、実験

とアンケート調査のそれぞれを実施し、結果をレポートにまとめて提出する。卒業論文をまとめる方法論として実験をするのか、アンケート調査を行うのかで設定するテーマが決まってくるため、その方向を定める、大まかなテーマづくりをするのが3年次秋学期の主要課題だ。テーマは、各自が興味のあることにリンクさせられるよう、先生がアドバイスしている。

4年次からは具体的な卒業論文執筆のための作業に入るが、スポーツ健康科学部では、人を対象にした実験や調査を行う場合、学部内の倫理審査委員会に申請して承認を得なければならない。実験・調査の目的や方法、留意点などを文書化することで、卒論の大まかな骨組みが出来上がる。5月末までを目処に申請し、早ければ夏休みまでに予備的な実験や調査に着手。秋学期からは、それぞれが個別のプランに沿って進行し、ゼミはその時々に応じて先生が指導を行っていく場になる。

現在の4年次生は、スポーツ健康科学部スタートの年に入学してきた第1期生。加えて、石倉教授自身、大学教員になって初めて担当するゼミだという。

「ですから学生たちにどこまで要求しているのか、どこで妥協するか、手探りの状態でした。特にネックになったのは、先輩がいないことです。彼らも先輩がいれば何となく分かることもあるのでしようが、領域が広いので具体的に何をすればいいのかイメージがつかめない。特に今年は、東日本大震災の影響で就職活動が例年より長引いていることもあり、四苦八苦しているところですよ」。

「何でも話せる楽しい雰囲気を作りたい」

「という方針の通り、ゼミの時間は笑い声があふれ、先生と学生との距離は近い。さらに石倉ゼミならではの、ゼミの前のランチタイムに3・4年次生が集まって昼食をとりながらミーティングを行うこと。先輩がいなくて苦労したこともあり、自分たちの経験を後輩に伝えていこうという配慮だ。

先生とともに手探りでゼミをつくってきた学生たちに、そもそもなぜスポーツ健康科学部を選んだのかを聞いてみた。

「高校では3年間サッカー部。キャプテンもやっていたので、スポーツ系の学部が適していると思って」「黒木大陸さん」「経済を学ぶ、簿記を身につける、いろんなことを考えたけれど、自分自身が形成されたのはやっぱりスポーツだったから」「石光弘貴さん」「自分もスポーツをやってきたし、スポーツが好きだったのではかの学部より興味が持った」「矢野孝昌さん」「スポーツなら分かりやすいし、空手に活かせたらと思って」「藤井雄介さん」と、やはり「スポーツ」というキーワードが決め手になった人が多い。

「プロゴルファーを目指しているの、ゴルフの技術だけでなくフィジカル面、メンタル面も学びたい」「上田浩介さん」「野球をやっているの、試合前の緊張感



がどうすればなくなるか、メンタルトレーニングを学びたかった」「野瀬伸悟さん」「陸上競技だけがをした時にお世話になったトレーナーの仕事に関心があつた」「村上雄亮さん」「ソフトテニスの試合で自分が思うようにプレーできないのはなぜかを知りたくて、プレーヤーとして関わってきたスポーツを学問として学ぶため」「岡垣陽子さん」と、具体的な学びを理由に挙げた人がいるのは頼もしい。

最後に、石倉教授に、どんなゼミ生を送り出したいかと問うと、「学力が高いだけではない、いわゆる賢い人に育ってほしい。同志社にはいろいろなタイプの学生がいるので、学生1人ひとりのよさを見つけて伸ばしていけたら」と語った。



パターとボールを見る目線の動きが初心者と上級者では異なることを、ゴルフの目線に合わせたカメラが映し出す映像で検証する。

再生医療で光を取り戻す 新規治療法の開発に取り組む再生医療研究プロジェクト

※個人、法人、企業やその他学外機関からの寄付を受けて、本学の教育研究活動を活性化し、多様化することを目的として設置するプロジェクト。研究センターとともに研究開発推進機構として組織され、独創的な研究拠点の形成を目指している。

2003年10月、視力を失った人びとが再び光を取り戻すことができるよう、視覚の再生医療を研究する寄付教育研究プロジェクト※「再生医療研究センター」が同志社大学に誕生した。8年が経過した現在、包括協定を結ぶ京都府立医科大学との共同研究により、いくつかの研究の成果が実際の治療に応用されつつある。国内はもちろん海外からも、その先進的研究が注目されているセンターの活動について、研究代表者である小泉範子生命医科学部医工学科教授に伺った。



同志社大学では、2003年に京都府立医科大学と学術交流に関する包括協定を締結し、生命科学 医学分野への取り組みを積極的にすすめてきました。その一環として設置されたのが、千寿製薬株式会社による寄付教育研究プロジェクト「再生医療研究センター」です。当センターは、京都府立医科大学の木下茂教授（視覚機能再生外科学）と千寿製薬株式会社との長い信頼関係を基盤として、両大学における医工連携研究を実現し、同志社大学の教育、研究活動を多様化、活性化する目的で、工学部先端科学技術センター（RCAS）に設置されました。2003年に私が京都府立医科大学から赴任し、翌年からは中村隆宏先生（現・チエ・プロフェッサー准教授）が着任しました。2008年には、眼表面炎症性疾患のメカニズム解明をテーマに研究を行っている上田真由美先生（現・チエ・プロフェッサー准教授）を加えて、炎症と再生をテーマにした幅広い視点からの研究活動を展開できるように、同年にセンターの名称も「炎症・再生医療研究センター」と改称し、生命医科学部に設置される寄付教育研究プロジェクトとして現在に至っています。現在、2名のチエ・プロフェッサーは生命

医科学部に所属しており、医工学科ティッシュエンジニアリング研究室の小泉、奥村直毅助教、学部生や大学院生たちと緊密な連携を持って研究、教育活動を行っています。当センターの特徴は、教員全員が京都府立医科大学で客員教員として診療に従事する現役の眼科医であることです。われわれのように研究を行う臨床医をクリニシャン・サイエンティストと呼びますが、同志社大学の研究室で得られた研究成果を患者さんの治療に応用することを目指すと同時に、診療の現場で必要とされている研究ニーズを大学研究室に持ち帰る橋渡的な役割を担いたいと考えています。ここでセンター教員の研究テーマをご紹介します（詳しくはセンターHPを参照ください）。

<http://saisei.doshisha.ac.jp/>。

Project-1 難治性眼表面疾患に対する角膜再生医療

代表者／中村隆宏

角膜や口腔粘膜上皮幹細胞を細胞ソースとして、組織工学の技術を用いて生体外で培養上皮シートを作成し、実際の眼表面に移植して、角膜を再建する。

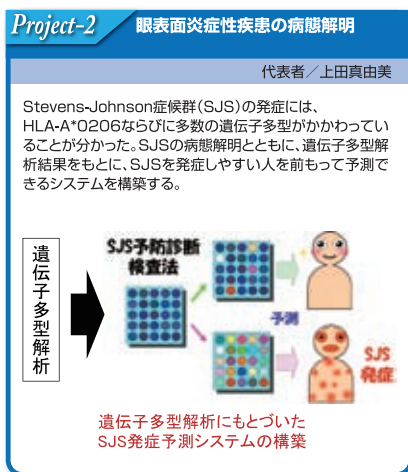
① 上皮幹細胞の採取
角膜（アロ、オート）
口腔粘膜（オート）
上皮幹細胞浮遊液

② 培養上皮幹細胞シート作成

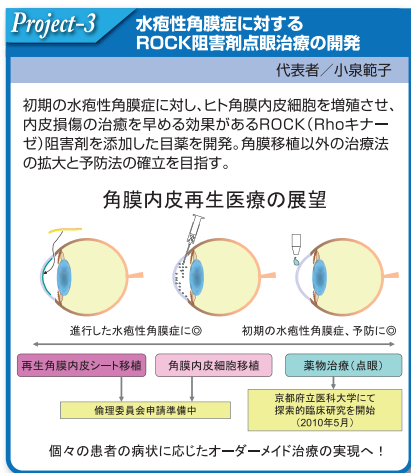
③ 眼表面へ移植

小泉 範子
【生命医科学部教授】

上田先生は、重症の視力障害をもたらす眼表面疾患と炎症との関わりについて研究を行っており（Project-2）、特にステイブンス・ジョンソン症候群の発症メカニズムに関する遺伝性素因の解明に関する研究では、シンガポール、インドとの国際共同研究を展開しています。すでに発症してしまっ

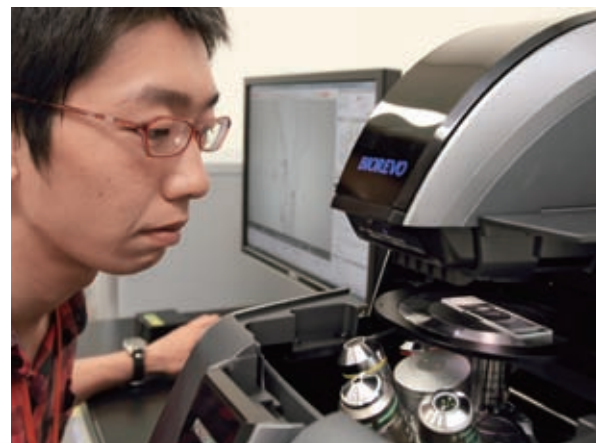


中村先生が行っている角膜上皮の再生医療の研究では、患者さん自身の口腔粘膜細胞を培養したシートを作成し、角膜上皮の再生医療に応用する技術を開発してきました（Project-1）。すでにこの治療法は京都府立医科大学で多くの症例に対する臨床研究の実績があり、重度の火傷、薬品による化学外傷、あるいは薬の副作用で起こるステイブンス・ジョンソン症候群など、角膜上皮の幹細胞がなくなる病気に対する治療効果が確認されています。再生角膜上皮シートを製品化する研究も進んでおり、将来企業が安定した品質の再生角膜上皮シートを作ることができれば、国内外の医療機関に届けることができます。



た患者さんに再生医療で治療することも重要ですが、重症疾患の発症予防につながる上田先生の研究は、大変意義深い研究です。

もう一つの研究は、当センターで始まり、現在は医工学科小泉研究室の主要研究テーマの1つである角膜内皮の再生医療です。角膜の裏側にある角膜内皮細胞は、角膜を透明に保つために必須の細胞であるにもかかわらず、再生能力を持っていません。そのために、病気やケガ、眼科の手術などによって角膜内皮細胞が障害されると、角膜が濁って視力を失います。このような病気（水疱性角膜症）に対して、当センターではコラーゲンシートなどを用いた培養角膜内皮シート移植の開発を行い、2006年には世界で初めて、ヒトと



同様に角膜内皮が再生しにくいサルの水疱性角膜症モデルを用いて、培養角膜内皮シート移植が可能であることを報告しました。さらに最近では、培養角膜内皮細胞の注入治療や、角膜内皮細胞を増殖させることによって水疱性角膜症の発症を予防する点眼薬の開発にも取り組んでいます（Project-3）。

京都府立医科大学眼科、同志社大学生命医科学部、滋賀医科大学動物生命科学研究所との共同で行っている角膜内皮再生医療の研究は、平成23年度国家基幹研究開発推進事業「再生医療の実現化プロジェクト」に採択され（研究代表者：京都府立医科大学木下茂教授）、培養角膜内皮細胞移植の臨床応用を3年後までに実現することを目指します。同志社大学では、奥村直毅助教を中心として、移植可能なヒト角膜内皮細胞の作成方法の確立と、動物を用いた効果と安全の検証など、重要な業務を担当します。

2003年に寄付教育研究プロジェクトとして始まった同志社大学の再生医療研究は、着実な研究実績を積み重ねながらグループとしての成長を遂げており、眼科再生医療の分野では国際的な研究拠点の1つとして認識されるようになり、再生医療の実現に向けた国家事業に同志社大学として参画できることは、研究者として大きな喜びであると同時に、その責任の重さを感じています。今後、当センターの特色を活かした同志社大学らしい研究を行い、新たな研究成果を世界に発信していきたいと思っています。



来年度就職を目指す皆さんへ

豊かな人生のために 充実した学生生活を

就職を取り巻く状況

2011年4月採用の本学学生の就職率は、前年度に比べ0.5ポイント下回り、96.1%となりました。2008年秋のリー

マンショック以降、金融危機や企業業績の悪化から採用抑制の傾向が続く中、就職率も低下しましたが、わずかながらも回復の兆しが見え始めた矢先に東日本大震災が

起こり、2012年4月採用(現4年次生)の行方注目が集まりました。大手企業を

中心に選考日程が延期される一方で、予定通りのスケジュールで選考された企業もあり、学生の就職活動は長期化しました。

キャリアセンターでは、活動を継続している4年次生や既卒者に対しても、求人情報の提供や相談体制を整える等、就職活動の支援に努めています。2013年4月採用

(現3年次生)に向けては、日本経済団体連合会の倫理憲章では、企業の広報開始時期が10月から12月へと2カ月間後ろ倒しに

なりましたが、キャリアセンターでは、10月の第1回就職ガイダンスを皮切りに職業や業界理解のためのセミナーを数多く開催し、就職活動の準備がしつかりとできるような支援をしています。

採用が抑制される一方で、会社の将来を担う中核となる人材はしっかりと確保したいという意欲を企業は強く持たれています。そのような状況において「厳選採用」と言われるように、今まで以上に徹底して質を重視する選考がなされていると言えます。これまでも指摘されてきましたが、早々と複数企業から内定を得る学生と、最終面接に至るものの内定を得られず、長期化を余儀なくされる二極化傾向にあると言えます。企業の知名度にこだわったり、特定の業種に偏った就職活動を行ったことに起因するケースも見受けられます。最終的な消費者の目に触れない企業であっても業績を伸ばし、発展している企業は数多くあります。就職活動が長期化した学生も、就職活動を進めるうちに自分に合った

企業を見る視点が定まり、最終的には満足いく就職先を決定しているケースが多くなります。目先の企業選びではなく、自分自身がどのような道を歩みたいのか、就職活動を行うにあたってまずは考えてほしいことです。

企業の求める人材

それでは、企業はどのような人材を求めているのでしょうか。経済産業省が、職場や地域社会の中で多様な人々と共に仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力を「社会人基礎力」として提唱しています。具体的には、「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チームで働く力(チームワーク)」の3つの基礎的な能力から構成されると定義付け、その3つの能力を主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律

今年度就職活動をした

先輩からのメッセージ

(2011年度 就職に関するアンケート)から

●文系男子 法 ◆悩みを相談しあったり、将来について熱く語れる仲間を見つけ、上手にストレスを分散してください。そして、人との出会いを大切にしてください。商 ◆とにかく自然体で話しました。よく見ていると、面接する側も多少なりと緊張していることが分かります。それをクスクスと笑えるくらいの余裕が大事です。そして、人生にそう何度もない機会なので、存分に楽しんでください。社会 ◆今後就職先は厳しくなっていくと思います。私もなかなか就職先が決まらず、周りの友人が就職活動を終える中、気持ちが悪えそうになったことも多くありました。ですが、最後は諦めずにやり抜く気持ちだけは持って、納得いくまでやろうと心に決めていました。どうか妥協せずに納得いく企業と出会えるまで、就職活動が続けてみてください。別に早く就職先を決めることも出会う人も多くなります。頑張り続けてください。●文系女子 文 ◆面接はその会社に対する熱意をいかに伝えるかが大事だということを強く感じました。マニュアルなどに頼らず、自分の熱い想いを面接官にぶつけてほしいと思います。きつと通じるはずですよ。また、面接は面接官との会話の場ですので、緊張しすぎずに会話を楽しくむくむく勢いで臨むと上手いと思います。法 ◆色んな業界を見てほしいです。CM等を通して学生が知っている企業は、本当に全体の一部であり、「有名な良い会社」とは限らないです。社会人と話す機会を増やしてください。あと、「自分が一体どんな人間で、一体何をしたいのか」に真正面から向き合ってください。経済 ◆書店などに出回っている就職活動のマニュアル本を頼りにしては、上手いきません。自分で考えて行動し、履歴書やエントリーシートは自分の言葉で書くようにしてください。その練習が出来ていれば、面接で予想外の質問をされた際にも、落ち着いて応える事が出来ると思います。◆何よりも足を使うこと！行動することが大切だと思います。そして、会社の規模や知名度にとらわれすぎることなく、自分の本当にやりたいことができる会社を探し出してほしいです。商 ◆就職活動は、人生を大きく左右する大切な場面です。すべて人生が決まるわけではないけれど、確実なる転機です。正面から向き合ってください。独りよがりにならず、周りの声を素直に聞くようにしてください。ピンチはチャンスです。何度も壁にぶつかりますが、その都度修正をしなければ必ず道は開けます。ありきたりな言葉ですが、悔いの残ら

性、ストレスコントロール力の12の要素に区分しています。この12の要素のうち最も重要だと考えられる要素として、企業は「主体性」と「実行力」を挙げています。そして、企業が学生に求める能力は「主体性」「粘り強さ」「コミュニケーション力」と言えるかと思っています。多くの企業が国内にとどまらずグローバル展開を図る中で、受身型の人間ではなく、常に周辺を取り巻く環境変化に対応できる柔軟な思考を持ち、自ら考え行動する人物が評価されています。また、グローバル化が進展する中で、社会人基礎力に加え、語学力を求める企業も増えています。

充実した学生生活を

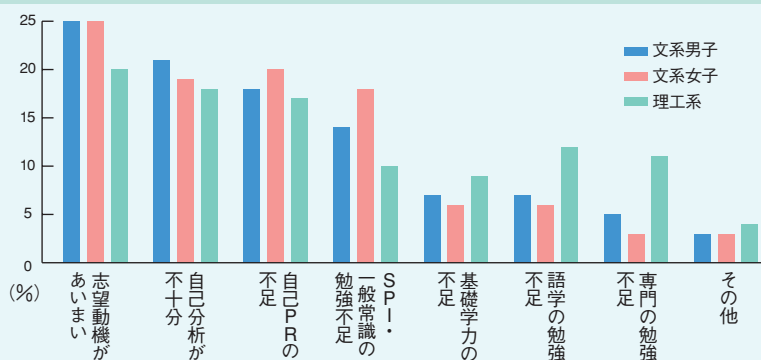
先に述べた社会人基礎力は、どのような身につくのでしょうか。そのためには何事にもチャレンジすることが大切です。授業はもとよりクラブ・サークル・ボランティア活動あるいはアルバイトを含め、自分の興味・関心のあるものを見出し、それに真剣に取り組むことにより達成感を味わったり、逆に失敗や挫折を経験することが一回りも二回りも自らを成長させます。そしてそのような行動をとる中で、自ずと社会に向ける目も広がり、また、多くの人と関わることで「人間力」が磨きあげられます。様々な経験を積み重ねることが卒業後の人生を豊かにするとともに、そのよう

な過程を経た学生に企業は魅力を感じ、結果として、就職活動における評価にも繋がります。漫然とした日々を送ることなく、常に何かにチャレンジする充実した学生生活を送ってほしいと思います。

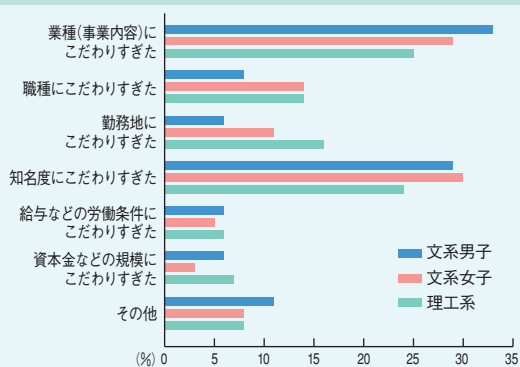
来年度就職を目指す皆さんへ

皆さんが就職する目的は、「社会での自立」「社会参加による貢献」「能力を生かした自己実現」ということになるかと思いますが。そのためにはまず、自分自身を知ること(自己理解)が就職活動の第一歩となります。そして自分のやりたいことがどのような職業で実現できるのか、自分の力がどのように職場で発揮できるのか考えてください。それを考える手段として、OB・OG訪問や企業セミナーへの参加などで幅広く情報を収集することが重要になります。そして業界・企業研究を経て、自分のやりたい職業、働きたい企業を見出し、業務内容をよく調べ、「自分はこの会社でどのように働きたいか」を話せるようにしておくことがポイントです。採用担当者は、面接などのやりとりから、熱意、主体性、コミュニケーション能力、問題意識や行動力を見極め、「一緒に仕事をしたい人物か」どうかを判断するからです。皆さんにとって魅力ある企業は必ず発見できるはずですが、自分を信じて前向きに就職活動にチャレンジしてください。

面接・試験段階での反省点



応募先選択段階での反省点



ない毎日を送ってください。政策◆就職活動に向けて自分を思い返し、自分には何もアピールできることがない!と思いこんで落ち込んでしまっているかもしれない。自分には何もないなんて、絶対にそんなことはありません。特別で珍しい、ものすごい経験でないダメだとかそんなことはありません。些細なことでも構わないです。その些細なことの中で自分がどんな風に考え、行動し、(わずかも学んだ)が重要なことです。就職活動は自分の経歴(自慢)ではなく、自分という人間を知ってもらうことだということをどうか忘れないでください。文化情報◆百聞は一見に如かずです。大量の情報を得られることなく、自分の目・耳・足を使っていろいろな企業を自分自身で感じることが大切だと思います。そのための努力は惜しまない方が自分のためになると思います。社会◆自分の好きなものの趣味で志望業界を決める人も多いかと思いますが、就職活動を進める上で、「好きだから」というのは志望理由としては弱いと思います。面接で突っ込まれたときに自信と熱意をもって語れるなら良いですが、しっかりと自己分析すれば、今まで気づかなかった自分の価値観が見えてきます。好きなものは変わることがあるけれど価値観は変わらないと思います。自分の価値観を軸に就職活動をするれば、業界志望理由・企業志望理由等、一本心の通ったものができると思います。理系◆生命医科◆筆記対策、面接対策◆対策だけはどれだけ早くから取り組んでも損はないと思います。どうしてこの業界?会社?職種?どうしてその経験の中でそういう行動をしたのか?というように「なぜ」の答えを常に考えることが求められているように感じました。理工◆主に面接や集団討論に関してですが、就職活動に欠かせないものはやはり「自信」だと思います。雰囲気やプレッシャーに負けて本来の力を発揮できない人は少なからずいると思います。それに打ち勝つ力はやはり自信だと感じました。そして、その自信を形成するのは過去1日1日の積み重ねだと思っています。特別な経験(ボランティアや委員など)をしてきた人が強いと思われがちですが私はそうは思いません。「何をしていたか」ではなく、「どう取り組んできたか」の方が絶対に大切だと思います。工学研究科◆とにかく自分が何をやりたかったかを明確にすること。まずはこれからの人生をかけて達成したい「コト」を見つけることが肝心。それが明確に定まることによって、それを達成するために、ある業界のある会社のある職種に就くという考え方が生まれます。それが「軸がある」志望動機だと思います。「軸がある」志望動機は、まず書類選考に落ちませんし面接でも簡単に落ちません。なのでやりたいことを見つけて「軸がある」志望動機を完成させてください。